アシダカグモ Heteropoda venatoria Linnaeusの生活史に就いて（補遺）

——脱皮の回數及び越年に關して——

關口晃一

東京文理科大學動物學教室

I 脱皮の回數

筆者は曩の論文* に於てアシダカグモの脱皮の回數を8回まで觀察し、猶成熟までには數回の脱皮の行はれることが豫想される旨報告しておいた。然るに昭和19年（1944）本學內で産卵せしめた約10個の卵嚢から孵化した仔蜘蛛の內只1頭だけが無事に冬を越すことを得て昭和20年（1945）9月9日最後の脱皮を終つて成熟した♀となり、約1週間後に交尾を濟ませた。之により只1例だけではあるが、本種の成熟までに經過する脱皮の回數が始めて明かになつたので、以下之に就いて簡單に記し、前論文を補遺することにする。

飼育方法は、孵化後の仔蜘蛛を別々に大型のシャーレの中に入れ、稍々成長して容器內を自由に走廻る樣になつてから、その容器內にボーフラを泳がした小型のシャーレを入れて羽化した蚊が直ちに仔蜘蛛の餌になる樣にした。之は一々小さな生きた動物を與へる手間が省けて極めて好都合であつた。更に成長してからは縱20 cm、橫及び高さ15 cmの金網張りの飼育箱に移し、同樣な方法で給餌した。冬期間は敎室中で最も日當りの良い所を選んで置き、時々小型のシャーレの水を取換へてやつた。蜘蛛は稀にシャーレの緣に寄つて水を吸つてゐる樣に見えることもあつたが、之を確認することは出來なかつた。

越冬後4月9日を第1回として度々ユスリカ、ハヘ、小型クモ類等を與へた

* Acta Arachnologica Vol. VIII, No.4, pp. 113-116 (1943)

が、之等を始めの中は捕食した形跡なく、確實に餌を捕へたのを目撃したのは5月1日が最初であつた。7月頃以後は多くイヘバヘ及びチョラウグモを與へた。次にその脱皮過程に於ける日附及び所要日數を示すと次表の通りである。

第1表成長過程に於ける日附及び所要日數

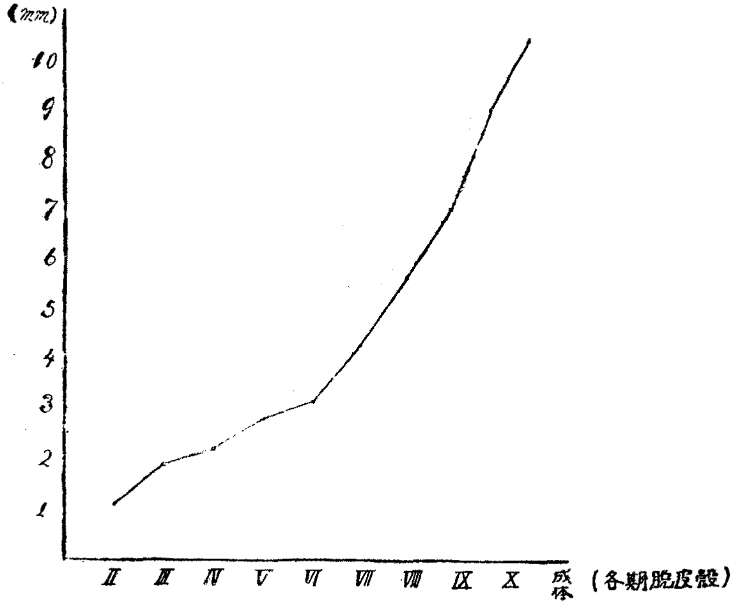
成長經過	年月日	所要日數
產卵	'44. VI. 12	
孵化	〃 VI. 28	16
第1回脱皮	〃 VII. 7	9
第2回脱皮	〃 VII. 18	11
第3回脱皮	〃 VIII. 10	23
第4回脱皮	〃 IX. 9	30
第5回脱皮	〃 X. 11 ?	32+ ?
第6回脱皮	'45. VI. 13	8ヶ月(越冬)
第7回脱皮	〃 VII. 4	21
第8回脱皮	〃 VII. 29	25
第9回脱皮	〃 VIII. 15	17
第10回脱皮	〃 IX. 9	25
交尾	〃 IX. 15	6

即ちこの個體に關する限り、成熟までに行ふ脱皮の回數は10回である。猶この表と前論文の表とを比較して注目されることは、後者ではその年の中に少くとも8回までの脱皮を濟ませてゐるのに對し、前者は5回の脱皮を濟ませただけで越冬を行つてゐること、及び各脱皮間の所要日數が後者の通常10−15日に比てし一般に著しく長く且つ區々であることである。之は飼料その他の飼育條件の相違によるとも考へ得るが、明かな原因に就いては全く不明である。

次に各段階に於ける發育狀況を脱皮殼の頭胸部の長さ* に就き測定し表示す

* 前論文に於ては頭胸部の測定に總て幅を用ひたが、その後の經驗により、幅よりも正中線の長さの方が正鵠を期し得る樣に思はれるので今回は總て之によることにした。

れば次の如くであり、更に之を圖表にすると第1圖の如くになる。



第1圖　脱皮殻を基とせる頭胸部の成長曲線

第2表　各期脱皮殻の測定値（mm）

脱皮殻 各期	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	成體 (♀)
頭胸部 (長さ)	—	1.1	1.9	2.2	2.8	3.1	4.2	5.5	6.8	8.7	10.0

之等の表及び圖によれば容易に一二の推論が考へられるが、今回は一切さしたことに觸れず、單に上記の事實を記録しておくに止める。只本報告に記個體は上記の如く成體に於て 10.0 mmであるが、今筆者の手許にある下田産アルコール漬標本の中から任意に成熟した ♀ 10頭を取出して測定した所、の結果は 10.8 mm ～ 12.1 mm で平均 11.43 mm となり、又他の標本中には 12

mm のものもあつた。從つて上記の個體は通常のものよりも可成り小型であることが分る。勿論之等の個體差が何に起因するかは現在の所全く不明である。然し若し之が脫皮回數の多少に原因するものであるならば、大型のものでは10回以上の脫皮を行ふであらうことは想像に難くない所である。この點に關しては更に今後の研究が必要である。

I 越　年

前論文に於て筆者は「……遲くとも10月下旬になれば、殆んど總てが脫皮を停止して姿を沒してしまふ」と記したが、昭和20年11月29日から12月2日までの4日間伊豆下田町の本學附屬臨海實驗所に滯在して、第1號官舍と寄宿舍とだけから9頭の成♀と1頭の亞成體(?)と3頭の幼蛛とを發見し、その中3頭の成♀を捕獲して持歸つた。之等は總て家屋內で發見され、その大部分が官舍の玄關の天井及びその傍の便所の腰板の所であつた。斯の樣な場所は夏期に於ても本種の好適な棲息場所であるが、注目すべきは今回は家屋外の破目板の所などに全然姿が見られないことであつた。猶天井に附着してゐる狀態には夏期と異る樣子は認められなかつたが、流石に行動は極めて緩漫になつてゐる樣に思はれた。

以上の事實から、少くとも1部は12月初旬まで「姿を沒してしまふ」ことなく家屋內に於て棲息してゐると見ることが出來る。猶今回♂が認められなかつたのは筆者が既に前論文に於て記したやうな理由によるものであらう。

附記　產卵と容器

筆者は產卵前の親蜘蛛は一般に前論文に記した樣な小型の飼育箱に入れて產卵せしめることにしてゐたが、昭和19年この樣な容器內では多くの場合に、最初に張られた絹布の面から卵が流れ落ちてしまつて失敗に終るのを見て、他の未產卵の蜘蛛を徑約 15 cm 又はそれ以上の硝子鉢に入れて總て完全な卵囊を作らせることに成功した。

結局之は完全な平面上では、最初に張る絹布が容器の壁に密着してしまつて

卵粒を受容するだけの弾力性を與へることが困難な爲であると考へられる。之に對して硝子鉢では內壁の曲面によつて常に絹布と內壁との間に一定の間隔が出來るので、卵は安全にその弾力性ある絹布上に止められるのであらう。然し硝子容器も步行などの點から見て、必ずしもこの蜘蛛にとつて最も好ましい容器でないことは明かであり、この點に關しては更に工夫の必要があると考へる。

朝鮮人の蜘蛛利用

岡　本　大　二　郎

兵庫縣三原郡阿萬町鹽屋620

私は朝鮮水原の農業學校に勤務中朝鮮の有用昆蟲の調査を企て、生徒に自分が又は家庭に於て利用した昆蟲に就き書かせたことがある。其時は昆蟲に限り蜘蛛に就いては別に調べるつもりであつたが、終戰、引揚により遂に其機會を失つて仕舞つた。上記調査票に昆蟲と思つて蜘蛛のことを書込んだ者が若干（149名中16名）あつたので、計畫的調査の不可能となつた今日のことゝて、不備乍ら本誌の餘白をかり一應記錄に止めておくことにした。何れも單にクモと記してゐたが形態習性等の說明より種名を推定した。

オホヒメグモを藥用に（6名）腫物（特に後頭の眞中に出來るもの）の藥に用ひ、利用回數は4名は多く2名は少い。腹部を手で潰して汁を其巢をまるめたもの（脫脂綿の代り）につけ、之を腫物の上にはりつけておくと膿をよく吸出し直ぐなほると云ふ。此話を折に觸れ生徒に持出してみると大抵知つて居り經驗者も多かつた。オホヒメグモを朝鮮語でヤクコミ（yak-ko-mi）と云ふ。ヤクは藥のこと、コミは蜘蛛のことで藥にする蜘蛛の意。

ドクグモの1種を魚釣餌料に（5名）本種は草叢等を這廻つてゐるものである。利用回數は3名は多く2名は少い。手で其儘採つたり足で輕くふんで採り、採つたものを其儘釣針に挿して用ひる。